

寺島 朋羽（てらしま・ほうう）

1、プロフィール

加藤楸邨・大野林火等の中央俳人を自宅に招いて句会を開くなど、中央の文学の風を呼び込み、下北の俳句のレベル向上に貢献し、今もその功績は生きつづけている。

<生没>

1895(明治 28)年4月 28 日 ~ 1972(昭和 47)年9月7日

<代表作>

『歳月』

<青森との関わり>

大正8年青森県立病院の医員として赴任。横浜村の村医を経て昭和 13 年むつ市に開業。芦光社を主宰する。

2、作家解説

本名は寺島鵬翼(ほうすけ)で、明治 28 年熊本市生まれ。藩医の父祖の業を継いで熊本医学専門学校へ進み、卒業と同時に青森県立病院へ赴任する。

昭和 13 年田名部(むつ市)へ移転して産婦人科医院を開業した。この頃から俳句を作るようになり、昭和 23 年には俳句結社芦光(あしかげ)を主宰し、昭和 25 年「芦光」を創刊した。その間、青森で高松玉麗や淡谷悠蔵らとも交わり、若山牧水歓迎会にも出席している。また、安藤姑洗子主宰の「ぬかご」同人にも推されている。

芦光社は、昭和 29 年に姑洗子の句碑を恐山山道冷水峠に建立し、姑洗子を招いての記念の下北郡下俳句大会を円通寺で開催したが、朋羽も選者となっている。

朋羽の「やわらかな革新的な自由さ」は芦光社友の個々の個性に反映し、朋羽の句境は「リベラルで温かい人柄を表している」と言われる。

昭和 22 年に始まった青森県俳句大会でも多くの入選作が選ばれ、第5回(昭和 26 年)から第 22 回(昭和 43 年)まで(第 21 回は除く)は、自らも選者となって、県内の多くの俳人を結集し、すぐれた作品を生み出す土壌の役割の一端を担っている。

芦光社の人々からの句集発刊の勧めにも常に遠慮の姿勢であったが、昭和 47 年病床にある朋羽の傍らで刊行の準備が進められ、その年の8月 31 日、私家版『歲月』が出版された。

「酒を愛し、下北を愛し、恐山をこよなく愛した」朋羽は、句集『歲月』の出版を待つかのように、昭和 47 年9月7日、享年 77 歳で生涯を閉じた。

3、資料紹介

○『歲月』

図書

1972(昭和 47)年8月

190mm × 130mm

創刊以来の「芦光」と『青森県俳句集』を基に、約 500 句を選び、朋羽の自由奔放な作句精神を受けて、句に取り組んだ時の、場の、季節感を重くみた構成としている。「歲月」の命名は著者、編集の中心は二本柳正である。